

感情コンピテンスとセルフエスティームの関連

西野 泰代

(受付 2013年5月28日)

問題と目的

学校現場における子どもの暴力行為やいじめ増加の背景に子どもたちの社会性の欠如があるとの指摘がなされながら、それに対する実証的な検討が国内において充分になされているとは言い難い現状がある。海外の先行研究では、3 - 4歳時の感情コンピテンス (emotional competence) がその後 (就学前まで) の social competence と関連すること (Denham, Blai, DeMulder, Levitas, Sawyer, Auerbach-Major & Queenan, 2003) や、児童期の攻撃行動を感情コンピテンスの低さが予測すること (Bohnert, Crnic, & Lin, 2003) が明らかにされている。また、中学生 (Grade 8-9) を対象とした研究では、感情コンピテンスが逸脱行為や「キレる」行為を予測することが示唆され (Wong & Ang, 2007)、大学生を対象とした縦断研究では、感情コンピテンスが後の精神的健康を予測することが明らかにされた (Ciarrochi & Scott, 2006)。これらの結果から、子どもたちの問題行動を予測する要因として感情コンピテンスは重要な役割を果たすと考えられる。また、子どもの健全な発達を支援する上で、感情コンピテンスは有効な介入方略を提案する重要な指標となるであろうと思われる。しかしながら、感情コンピテンスに関するこれまでの研究の多くは、その発達プロセスや構成概念に注目したものであり、子どもの問題行動を抑制あるいは低減するための介入方略を示唆することを目指した実証的な研究はあまりみられない。さらに、感情コンピテンスはさまざまな要因を内包し (Halberstadt, Denham, & Dunsmore, 2001)、感情コンピテンスを測定する尺度についてはいまだ統一した見解に至っていない。そこで、本研究は、子どもの問題行動を予測する要因としての感情コンピテンスに焦点をあて、その測定尺度を作成することを目的とする。また、これまで子どもの問題行動との関連が実証されてきたセルフエスティーム (西野, 2007, 2009; 西野・小林・北川, 2009) と感情コンピテンスとの関連についても併せて検討することを目的とする。

コンピテンス (competence) という概念は、「変わりやすい社会的、物理的環境を相手にして、個人に成長と熟達をもたらす能力」とされる (White, 1959)。感情コンピテンスは、他者と相互作用したり、関係を構築したりするための能力 (social competence) にとって重要であり (Saarni, 1990)、成熟した感情コンピテンスは、感情を引き出すような社会的相互

作用における自己効力感 (self-efficacy) の証だと考えられた (Saarni, 2007)。Saarni, Compos, Camras & Witherington (2006) は、感情コンピテンスの構成要素として 8 つのスキル (自己の感情状態への気づき, 他者の感情を理解するスキル, 感情を表現するスキル, 他者の感情経験に共感する力, 内的感情と表出された感情の不一致を理解するスキル, 嫌悪感情や苦悩に対して自己制御方略を用いて対処するスキル, 人間関係における感情コミュニケーションへの気づき, 感情的自己効力感) を想定しているが, それぞれのスキルが社会的・物理的環境とどのような相互作用をすることにより子どもの問題行動に影響を及ぼすのかということに関しての詳細な検討ははまだその途上にある。

久木山 (2002) では, アサーションと情動制御の関連について検討することを目的として, Saarni (1999) で提示された 8 つの感情コンピテンス下位概念のうち基本となる 6 つの要因をとりあげ, 「ネガティブな情動の影響への対処」「状況の読み取り」「自分の情動の覚知」「他者の情動への関心」「共感性」「表出の制御」という 6 つの下位尺度から成る情動コンピテンス尺度を作成した。この尺度では「情動を表現するスキル」や「情動に関する自己効力」に関する項目が含まれておらず, また, この尺度と言語的攻撃行動尺度との相関を調べた結果では「ネガティブな情動の影響への対処」と「共感性」のみ弱い負の相関を示していた。

森口 (2010) では, 感情コンピテンスを感情効力感として捉えなおし, 友人関係の中で感情的に葛藤が起こる場面での感情効力感を測定する尺度が開発された。この尺度は「制御」「表出」「共感」の 3 因子から成り, それぞれの因子と友人関係ストレスおよび自尊感情との関連を調べた結果, 自尊感情に対して「表出」と友人関係ストレスの交互作用が有意な傾向にあることが示された。すなわち, 友人関係ストレス得点が高い場合, ネガティブな感情を表出できないと感じている者は表出できると感じている者よりも自尊感情が低くなる傾向にあることが示唆されたのである。このことから, 子どもの暴力行為やいじめといった問題行動への介入に資する知見を提供するためには, 葛藤場面における感情効力感に注目することは重要な視点であると思われる。しかしながら, 葛藤場面において適切に自分の感情を表出するためには相手の感情を読み取ることや理解することも必要であり (Saarni, 2007), 広義に捉えた新たな感情コンピテンス測定尺度を作成する必要があると考えられる。

以上のことから, 本研究は, Saarni et al. (2006) の感情コンピテンス構成スキルを参考にして, 8 つのスキルのうち他の先行研究においてその類似概念と問題行動との関連が確認されている (Arsenio, Cooperman, & Lover, 2000; Arsenio & Lemerise, 2001; Cook, Greenberg, & Kusche, 1994; Crick & Dodge, 1994; Eisenberg & Spinrad, 2004) 5 つの要因 (自己感情の覚知, 他者感情の理解, 共感, 感情表出, 感情制御) をピックアップして新たに尺度を作成

することを第1の目的とする（研究1）。また、研究1で作成した感情コンピテンス尺度を用いて、感情コンピテンスとセルフエスティームとの関連について検討すること（研究2）も併せて本研究の目的とする。

研 究 1

方法

調査対象および調査時期 大学生97名（男子40名／女子57名；平均年齢20.08（SD=.89）歳）に対し、2012年11月、12月に質問紙調査を実施した。

調査内容 フェースシートにおいて、性別、学年、年齢をたずねた。質問項目として、「自己感情の気づき」に関する8項目（青木（2011）および坂上・菅沼（2001）を参考にし新たに作成）、「他者感情の理解」に関する8項目（青木（2011）および坂上・菅沼（2001）を参考にし新たに作成）、「共感」に関する10項目（鈴木・木野（2008）の多次元共感性尺度（MES）から「他者志向的反応」5項目と「視点取得」5項目）、「感情表出」に関する6項目と「感情制御」に関する6項目（それぞれ森口（2010）の感情効力感尺度から「表出」6項目と「制御」6項目）の計38項目を感情コンピテンス尺度として設定した。

今回作成する尺度は、問題行動を予測する際の指標として用いるためのものであり、先行研究の知見から、感情コンピテンスが高ければ問題行動が生起する可能性は低いであろうと予想する。そこで、感情コンピテンス尺度の併存的妥当性を確認するために、大久保（2005）の学校への適応感尺度から「居心地の良さの感覚」11項目と「被信頼・受容感」6項目の計17項目を適応感尺度として用いた。感情コンピテンスが高ければ、適応感が高いであろうと予想する。

それぞれの尺度を構成する質問項目に対する回答はすべて5件法（1＝全くあてはまらない、2＝あまりあてはまらない、3＝どちらでもない、4＝ややあてはまる、5＝非常にあてはまる）で求められた。

結果と考察

因子構造 感情コンピテンスを測定する38項目について探索的因子分析を実施した。

まず、主因子法プロマックス回転による分析を行ったところ、固有値の減衰状況や分散の累積値から4因子解が妥当だと思われたため、再度因子数を4に設定して分析を行った。その結果をTable 1に示す。因子負荷量が.35以下であった項目は除外した。第1因子は「自分が怒っているときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。」「自分が悲しんでいるときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。」というような項目から成り

立っており、また、内的整合性を確認するためアルファ係数を算出したところ $\alpha = .84$ と十分な数値であったので、尺度の信頼性と解釈可能性からこれら11項目を「自己感情の覚知」と命名した。同様に、第2因子は「人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分は関係なくても応援したくなる。」「悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。」というような項目から成り、信頼性係数は $\alpha = .82$ であったので、これら10項目を「共感」と命名した。第3因子は「友人に悪口を言われてイライラしたとき、実際に、そのイライラした気持ちを相手に伝えることができる」「友人とケンカをしてしまい、悲しかったとき、実際に、その悲しかった気持ちを相手に伝えることができる」というような項目から成り、信頼性係数は $\alpha = .86$ であったので、これら6項目を「感情表出」と命名した。第4因子は「友人が自分のことをわかってくれなくて、悲しかったとき、実際に、その悲しかった気持ちを落ち着かせることができる」「友人に注意しても、全く聞いてくれずイライラしたとき、実際に、そのイライラした気持ちを落ち着かせることができる」というような項目から成り、信頼性係数は $\alpha = .85$ であったので、これら6項目を「感情制御」と命名した。それぞれの項目を加算したものを各下位尺度の得点として以降の分析に用いた。

適応感尺度について、主因子法プロマックス回転により因子分析を行ったところ、固有値の減衰状況と分散の累積値から1因子解が妥当だと判断されたため、あらためて主成分分析を行った。17項目すべての因子負荷量は.40以上あり、信頼性係数は $\alpha = .92$ だったので、これら17項目を加算したものを適応感尺度得点とした。

基準関連妥当性の検討 4因子から成る感情コンピテンス尺度と適応感尺度との併存的妥当性を検討するために、感情コンピテンスの下位尺度得点と適応感尺度得点の相関を調べた。その結果を Table 2 に示す。「自己感情の覚知」「共感」「感情表出」はそれぞれ「適応感」と有意な正の相関を示し、「感情制御」は「適応感」と正の有意な相関傾向を示した。

以上のことから、内的整合法による尺度の信頼性の確認と、問題行動を予測する要因を測定するための尺度としての基準関連妥当性の検討による妥当性の確認により、本研究において作成した感情コンピテンス尺度は問題行動を予測する尺度としての使用に堪えるものであろうと判断した。

研 究 2

本研究の目的は、研究1で作成した感情コンピテンス尺度を用いて、感情コンピテンスを構成する下位概念とセルフエスティームとの関連について検討することである。感情コンピテンスの下位尺度の一部には性差が確認されており (Brody & Hall, 1993)、また、セルフエスティームにも性差が確認されている (Harter, 1990) ことから、本研究では性差にも注目

Table 1 感情コンピテンス尺度因子分析結果

項 目	F1	F2	F3	F4
自己感情の覚知 ($\alpha=.84$)				
自分が怒っているときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。	.71	-.27	.09	.18
自分が悲しんでいるときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。	.69	.01	.05	.11
自分が悲しんでいるときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。	.68	-.09	-.22	-.08
自分が怒っているときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。	.65	-.25	-.06	-.05
自分が喜んでいるときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。	.57	.18	-.08	.24
自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかってもらう。	.54	.07	.02	.06
人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	.54	.10	.20	-.01
常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。	.49	.11	.34	-.21
悲しんでいる自分を想像しても、あまりピンとこない。	-.48	-.24	.19	-.01
自分が喜んでいるときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。	.45	.05	-.07	-.15
人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	.35	.13	.29	-.13
共感 ($\alpha=.82$)				
悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	-.02	.76	-.21	-.05
他人が失敗しても同情することはない。	.10	-.71	-.04	.08
人が悲しんでいるときに、その悲しみが理解できる。	-.15	.66	.21	.15
人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分は関係なくても応援したくなる。	-.05	.65	-.22	.05
人が怒っているときに、その怒りが理解できる。	.01	.61	.14	.10
悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない。	.07	-.54	-.33	.11
人が心から楽しんでいるかどうか分かる。	.04	.44	.00	.17
人が喜んでいるときの状態はすぐイメージできる。	.11	.43	.01	.24
悲しんでいる相手を想像しても、あまりピンとこない。	-.31	-.37	.17	.04
人が悲しんでいるときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。	.25	.36	-.14	-.22
感情表出 ($\alpha=.86$)				
友人が自分のことをわかってくれなくて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	.07	-.18	.85	-.03
友人に悪口を言われてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	-.02	-.12	.77	.03
友人とけんかをしてしまい悲しかったとき、実際にその悲しかった気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	-.08	.18	.75	-.16
友人に注意しても全く聞いてくれずイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	-.08	-.03	.70	.13

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4
友人から自分が気にしていることを言われて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	.06	-.06	.66	.12
友人と遊ぶ約束をしていたがその約束を破られてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	-.10	.03	.55	.10
感情制御 ($\alpha = .85$)				
友人とけんかをしてしまい悲しかったとき、実際にその悲しかった気持ちを自分で落ち着かせることができる。	-.01	.05	-.02	.85
友人が自分のことをわかってくれなくて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.09	.10	-.03	.78
友人に注意しても全く聞いてくれずイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.09	-.09	.04	.75
友人から自分が気にしていることを言われて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.00	-.12	.04	.66
友人に悪口を言われてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを自分で落ち着かせることができる。	-.17	.13	-.04	.65
友人と遊ぶ約束をしていたがその約束を破られてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを自分で落ち着かせることができる。	-.01	.07	.12	.47
因子間相関				
	F 1	.43***	.17	.07
	F 2		.29**	.17
	F 3			.42***

Table 2 各尺度間相関

	自己感情の覚知	共感	感情表出	感情制御
適応感	.22*	.39***	.25*	.19 [†]

[†] $p < .10$, * $p < .05$, *** $p < .001$

して検討を行う。

方法

調査対象および調査時期 大学生102名（男子53名／女子49名；平均年齢20.17（SD = .91）歳）に対し、2013年1月に質問紙調査を実施した。

調査内容 研究1で作成した感情コンピテンス尺度33項目とセルフエスティーム尺度（山本・松井・山成，1982；Rosenberg（1965）の作成した尺度の日本語訳）10項目を使用。

基本統計量 感情コンピテンスについて尋ねる33項目について、まず、主因子法プロマッ

Table 3 感情コンピテンス尺度因子分析結果

項 目	F1	F2	F3	F4	F5
感情制御 ($\alpha = .90$)					
友人が自分のことをわかってくれなくて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.84	-.18	-.07	-.17	.20
友人とけんかをしてしまい悲しかったとき、実際にその悲しかった気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.80	.10	.00	.11	-.16
友人に注意しても全く聞いてくれずイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.79	.06	.05	.03	-.07
友人に悪口を言われてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.70	.08	-.19	.04	.16
友人と遊ぶ約束をしていたがその約束を破られてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.67	.20	-.11	.12	-.07
友人から自分が気にしていることを言われて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを自分で落ち着かせることができる。	.65	.18	.13	-.05	.00
感情表出 ($\alpha = .86$)					
友人に悪口を言われてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	-.09	.90	-.03	-.07	.01
友人と遊ぶ約束をしていたがその約束を破られてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	.08	.76	.19	-.04	-.24
友人から自分が気にしていることを言われて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	.11	.68	-.05	-.14	.08
友人に注意しても全く聞いてくれずイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	.03	.63	-.19	.01	.20
友人が自分のことをわかってくれなくて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	.21	.57	.13	-.01	-.02
友人とけんかをしてしまい悲しかったとき、実際にその悲しかった気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。	.06	.53	-.04	.10	.13
他者感情の理解 ($\alpha = .79$)					
人が悲しんでいるときに、その悲しみが理解できる。	-.05	-.05	.95	-.16	.01
悲しんでいる相手を想像しても、あまりピンとこない。	.08	-.09	-.61	.08	.11
悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない。	.03	.08	-.56	-.11	.05
人が怒っているときに、その怒りが理解できる。	-.06	.26	.51	-.07	.25
人が喜んでいるときの状態はすぐイメージできる。	-.08	.10	.46	.21	.27
人が心から楽しんでいるかどうかがわかる。	-.09	.06	.46	.08	-.03
他人が失敗しても同情することはない。	-.07	.13	-.44	.05	-.13

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
自己感情の覚知 ($\alpha=.81$)					
自分が悲んでいるときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。	-.09	.15	-.03	.74	.02
自分が怒っているときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。	.01	.00	.17	.70	-.15
自分が悲んでいるときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。	.08	-.21	-.04	.67	.03
自分が怒っているときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。	.15	-.13	-.10	.58	.03
自分が喜んでいるときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。	.13	-.01	.30	.56	-.11
悲んでいる自分を想像しても、あまりピンとこない。	.29	-.12	.13	-.52	-.15
自分が喜んでいるときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。	.08	-.11	-.13	.44	.08
喜んでいる自分を想像しても、あまりピンとこない。	.04	.02	-.16	-.37	-.26
共感 ($\alpha=.78$)					
常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。	.01	.02	.02	-.04	.78
人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	.02	.18	-.05	.09	.63
自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	-.07	-.02	-.08	.14	.62
人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	-.02	.24	-.05	.00	.56
悲んでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	.10	-.16	.24	-.07	.42
人が悲んでいるときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。	.15	-.15	.32	.08	.38
因子間相関					
	F 1	.52***	.22*	.20*	.41***
	F 2		.23*	.06	.29**
	F 3			.45***	.55***
	F 4				.48***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

クス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況および分散の累積値から 5 因子解が妥当だと判断されたため、あらためて因子数を 5 として分析を行った。その結果を Table 3 に示す。因子負荷量が .35 に満たないものは除外した。第 1 因子に負荷する 6 項目の信頼性係数は $\alpha=.90$ であり、十分な内的整合性が認められた。また、負荷する項目は「友人に注意しても全く聞いてくれずイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを自分で落着かせることができる。」「友人から自分が気にしていることを言われて悲しかったとき、その

悲しかった気持ちを自分で落ち着かせることができる。」というようなものであり、その内容から「感情制御」と命名した。同様に、第2因子に負荷する6項目の信頼性係数は $\alpha=.86$ であり、「友人と遊ぶ約束をしていたがその約束を破られてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。」「友人が自分のことをわかってくれなくて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。」といった内容から「感情表出」と命名した。第3因子に負荷する7項目の信頼性係数は $\alpha=.79$ であり、「人が悲しんでいるときに、その悲しみが理解できる。」「人が喜んでいるときの状態はすぐイメージできる。」といった内容から「他者感情の理解」と命名した。第4因子に負荷する8項目の信頼性係数は $\alpha=.81$ であり、「自分が悲しんでいるときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。」「自分が怒っているときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。」といった内容から「自己感情の覚知」と命名した。第5因子に負荷する6項目の信頼性係数は $\alpha=.78$ であり、「自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかれようとする。」「人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。」といった内容から「共感」と命名した。それぞれの項目を加算したものを各下位尺度の得点として以降の分析に用いた。

結果と考察

基本統計量 感情コンピテンズについて尋ねる33項目について、まず、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況および分散の累積値から5因子解が妥当だと判断されたため、あらためて因子数を5として分析を行った。その結果をTable 3に示す。因子負荷量が.35に満たないものは除外した。第1因子に負荷する6項目の信頼性係数は $\alpha=.90$ であり、十分な内的整合性が認められた。また、負荷する項目は「友人に注意しても全く聞いてくれずイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを自分で落ち着かせることができる。」「友人から自分が気にしていることを言われて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを自分で落ち着かせることができる。」というようなものであり、その内容から「感情制御」と命名した。同様に、第2因子に負荷する6項目の信頼性係数は $\alpha=.86$ であり、「友人と遊ぶ約束をしていたがその約束を破られてイライラしたとき、実際にそのイライラした気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。」「友人が自分のことをわかってくれなくて悲しかったとき、その悲しかった気持ちを相手の気分を害することなく、相手に伝えることができる。」といった内容から「感情表出」と命名した。第3因子に負荷する7項目の信頼性係数は $\alpha=.79$ であり、「人が悲しんでいるとき

に、その悲しみが理解できる。」「人が喜んでいいるときの状態はすぐイメージできる。」といった内容から「他者感情の理解」と命名した。第 4 因子に負荷する 8 項目の信頼性係数は $\alpha = .81$ であり、「自分が悲しんでいるときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考えるほうだ。」「自分が怒っているときの状態や身体感覚はすぐイメージできる。」といった内容から「自己感情の覚知」と命名した。第 5 因子に負荷する 6 項目の信頼性係数は $\alpha = .78$ であり、「自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかってもらう。」「人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。」といった内容から「共感」と命名した。それぞれの項目を加算したものを各下位尺度の得点として以降の分析に用いた。

セルフエスティーム尺度 10 項目について、確認的因子分析を行ったところ、因子負荷量が .35 に満たない 1 項目（「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」）を除き 1 因子構造が認められた。信頼性係数を求めたところ $\alpha = .88$ であり、十分な内的整合性があると判断されたため、これら 9 項目の加算得点を自尊感情尺度得点として以降の分析に用いた。

感情コンピテンスの各下位尺度とセルフエスティーム尺度それぞれの平均値と標準偏差および性別による *t* 検定の結果を Table 4 に示す。*t* 検定の結果、「他者感情の理解」と「共感」において女子の得点が男子の得点よりも有意に高いことが明らかにされた。これにより、女子は男子よりも対人関係において他者の悲しみや怒りといった感情を理解したり、自分と違う考え方の人の話を分かってもらったりする傾向にあることが示唆された。Zahn-Waxler & Robinson (1995) は、女子の方が対人関係において他者と調和したり、他者の健康を気遣ったりする傾向にあることを報告しているが、本研究の結果からもその傾向がうかがえた。

感情コンピテンスとセルフエスティームとの関連 感情コンピテンスの各下位尺度を構成する「感情制御」「感情表出」「他者感情の理解」「自己感情の覚知」「共感」と「セルフエスティーム」との男女別の相関を Table 5 に示す。

Table 4 男女別による各尺度得点の平均値と標準偏差値および *t* 検定の結果

	男子 (N=53)	女子 (N=49)	<i>t</i> 値
感情制御	19.90 (4.67)	21.31 (5.00)	n. s.
感情表出	17.47 (4.23)	17.31 (4.45)	n. s.
他者感情の理解	23.91 (3.38)	25.82 (3.04)	2.99**
自己感情の覚知	28.92 (5.47)	30.43 (5.97)	n. s.
共感	22.04 (3.68)	24.06 (3.12)	2.98**
セルフエスティーム	27.65 (7.01)	29.94 (6.37)	1.71†

†*p* < .10, ***p* < .01

Table 5 各尺度間相関 (N=102; 53 boys and 49 girls)

	1	2	3	4	5	6
1. 感情制御		.62***	.31*	.25 [†]	.43**	.53***
2. 感情表出	.44**		.32*	-.06	.25 [†]	.32*
3. 他者感情の理解	.04	.15		.33*	.63***	.26 [†]
4. 自己感情の覚知	.13	.18	.56***		.50***	.08
5. 共感	.35*	.38**	.34*	.44**		.29*
6. セルフエスティーム	.41**	.28 [†]	.25 [†]	.03	-.01	

Note: 対角線より上部に男子, 下部に女子の相関係数を示す。

[†]p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001

男子では、「感情制御」「感情表出」「共感」と「セルフエスティーム」との間に有意な正の相関が認められた。また、「他者感情の理解」と「セルフエスティーム」との間には有意な正の相関傾向が認められた。一方、女子では、「感情制御」のみ「セルフエスティーム」との間に有意な正の相関が示され、「感情表出」「他者感情の理解」と「セルフエスティーム」との間に有意な正の相関傾向が確認された。「自己感情の覚知」と「セルフエスティーム」との間には男女ともに有意な相関は示されなかった。これらのことから、男女ともに、セルフエスティームの高い人はネガティブな感情が引き出されるような場面において自分の感情を制御したり、あるいは自分の感情をうまく相手に伝えたりすることができる可能性が高いことが予測される。また、男子ではセルフエスティームが高い人は他者への共感が高い可能性も示唆された。

総合的考察と今後の課題

感情コンピテンズ尺度について

研究1で作成した感情コンピテンズ尺度は4因子であることが確認されたが、研究2の分析結果では5因子構造が認められた。Table 1とTable 2を比較すると、「感情制御」と「感情表出」は全て同じ項目で構成されている。それに対し、Table 1で「共感」因子に負荷した7項目（「人が怒っているときに、その怒りが理解できる」「人が悲しんでいるときに、その悲しみが理解できる」「悲しんでいる相手を想像しても、あまりピンとこない」「人が喜んでいるときの状態はすぐイメージできる」「人が心から楽しんでいるかどうかがわかる」「悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない」「他人が失敗しても同情することはない」）がTable 2では「他者感情の理解」因子に負荷した。また、Table 1で「自己感情の覚知」因子に負荷した4項目（「自分と違う考え方の人と話しているとき、その人

がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする」「人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする」「人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く」「常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている」)が Table 2 では「共感」因子に負荷した。Table 2 における「自己感情の覚知」「他者感情の理解」「共感」の因子間相関はそれぞれ中程度以上あり、3 要因の間には互いに類似した概念が内包されている可能性は否定できないであろう。これにより、研究 1 で作成された尺度について、内的整合性や既存の尺度との関連により信頼性と妥当性は確認されたが、対象とする集団によって因子構造に差異が見られるという点で、検討の余地があると言えよう。

Saarni, et al. (2006) において、感情コンピテンスの下位概念 8 つのうち 8 番目に示された「感情的自己効力感」は他の 7 つのスキルがかなり成熟した段階になってから獲得されると予想された。本研究で用いた「感情制御」と「感情表出」は感情的自己効力感に相当するものであるが、Table 1 と Table 2 における因子間相関の数値を比較したところ、Table 1 では、「感情表出」のみ「共感」と弱い正の相関を示した。また、Table 2 では、「自己感情の覚知」と「感情表出」の関連が有意でなかったことを除き、「自己感情の覚知」「他者感情の理解」「共感」それぞれと「感情制御」と「感情表出」との間には有意な正の相関が認められた。このことから、Saarni, et al. (2006) の想定が正しいとすれば、Table 1 よりも Table 2 に示された尺度の方がより適切であると判断できるかもしれない。よって、今後は、Table 2 に示した尺度を基にさらなる検討を進めていくことが望ましいであろうと思われる。

感情コンピテンスとセルフエスティームとの関連

久木山 (2002) では、情動コンピテンスの 5 因子のうちの 4 つ (「ネガティブな情動の影響への対処」「自分の情動の覚知」「他者の情動への関心」「共感性」) が「自尊感情 (セルフエスティーム)」との間に弱い正の相関を示したこと、また、「表出の制御」は「自尊感情」との間に弱い負の相関を示したことが報告された。本研究では、Table 5 に示されたように、男女とも感情コンピテンスの 5 因子と「セルフエスティーム」との間で示された有意な相関はすべて正の方向であり、また相関の数値は中程度 ($\gamma = .25 \sim .53$) であった。

久木山 (2002) では、「表出の制御」が「自尊感情」との間に弱い負の相関を示した理由として、「因子を構成する項目がネガティブな情動の表出を中心としたものであった」ためではないかと解釈されている。本研究で用いた項目にも「悲しい」「イライラした」といったネガティブな感情の表出が含まれており、久木山 (2002) で作成された尺度項目と比較すると、本研究で作成された尺度には「・・・できる」という表現が用いられているという相違点がある。このことから、「効力感」の有無が自尊感情と感情コンピテンスとの関連に影響

響を及ぼしている可能性が予測される。

森口（2010）では、自尊感情に対して「表出」と友人関係ストレスの交互作用が有意な傾向にあることが示された。本研究では、感情コンピテンズとセルフエスティームとの直接的関連を検討したのみであったが、今後、暴力行為やいじめといった問題行動と自尊感情との関連に感情コンピテンズがどのような影響を及ぼすのかについて実証的な検討を行うことが必要であろう。

引用文献

- 青木万里（2011）他者理解尺度の作成と活用実践 鎌倉女子大学紀要, **18**, 39-51.
- Arsenio, W., & Cooperman, S., & Lover, A. (2000) Affective predictors of preschoolers' aggression and peer acceptance: Direct and indirect effects. *Developmental Psychology*, **36**, 438-448.
- Arsenio, W., & Lemerise, E. (2001) Varieties of childhood bullying: Values, emotion processes, and social competence. *Social Development*, **10**, 59-73.
- Bohnert, M. A., Crnic, A. K., & Lim, G. K. (2003) Emotional competence and aggressive behavior in school-age children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **31**, 79-91.
- Brody, L., & Hall, J. (1993) Gender and emotion. In M. Lewis & J. Haviland (Eds.), *Handbook of emotions*. New York: Guilford Press. pp. 447-460.
- Ciarrochi, J., & Scott, G. (2006) The link between emotional competence and well-being: a longitudinal study. *British Journal of Guidance & Counselling*, **34**, 231-243.
- Cook, E., Greenberg, M., & Kusche, C. (1994) The relations between emotional understanding, intellectual functioning, and disruptive behavior problems in elementary school-aged children. *Journal of Abnormal Psychology*, **22**, 205-219.
- Crick, N., & Dodge, K. (1994) A review of social-information processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Denham, A. S., Blair, A. K., DeMulder, E., Levitas, J., Sawyer, K., Auerbach-Major, S., & Queenan, P. (2003) Preschool emotional competence: Pathway to social competence? *Child Development*, **74**, 238-256.
- Eisenberg, N., & Spinrad, L. T. (2004) Emotion-related regulation: Sharpening the definition. *Child Development*, **75**, 334-339.
- Halberstadt, G. A., Denham, A. S., & Dunsmore, C. J. (2001) Affective social competence. *Social Development*, **10**, 79-119.
- Harter, S. (1990) Self and identity development. In S. Feldman & G. Elliot (Eds.), *At the threshold: The developing adolescent*. Cambridge, MA: Harvard University Press. pp. 352-387.
- 久木山健一（2002）情動コンピテンズと社会的情報処理の関連 —アサーション行動を対象として— カウンセリング研究, **35**, 66-75.
- 森口竜平（2010）青年期における感情効力感と心理的適応との関連 *Human Developmental Research*, **24**, 155-166.
- 西野泰代（2007）学級での疎外感と教師の態度が情緒的な問題行動に及ぼす影響と自己価値の役割 発達心理学研究, **18**, 216-226.
- 西野泰代（2009）中学生の学校ストレスに対する自己価値の役割 健康心理学研究, **22**, 17-27.
- 西野泰代・小林佐知子・北川朋子（2009）高学年児童の抑うつに対する社会環境の影響と自己価値の役割 心理学研究, **80**, 252-257.
- 大久保智生（2005）青年の学校への適応感とその規定要因 —青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, **53**, 307-319.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. New York: Princeton University.
- Saarni, C. (1990) Emotional competence. In Ross Thompson (Ed.), *Nebraska symposium: Socioemotional*

- development*. Lincoln, University of Nebraska Press. pp. 115-161.
- Saarni, C. (1999) *The development of emotional competence*. New York: The Guilford Press.
- Saarni, C. (2007) The development of emotional competence: Pathway for helping children to become emotionally intelligent. In R. Bar-on, J. G. Maree, & M. J. Elias (Eds.), *Educating People to Be Emotionally Intelligent*. London: PRAEGER. pp. 15-36.
- Saarni, C., Campos, J. J., Camras, L. A., & Witherington, D. (2006) Emotional development: Action, communication, and understanding. In W. Damon (Editor-in-Chief) & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (6th ed.). New York: Wiley. pp. 226-299.
- 坂上裕子・菅沼真樹 (2001) 愛着と情動制御 —対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連— 教育心理学研究, **49**, 156-166.
- 鈴木有美・木野和代 (2008) 多次元共感性尺度 (MES) の作成 —自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- White, R. W. (1959) Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, **66**, 297-333.
- Wong, S. S., & Ang, P. R. (2007) Emotional competencies and maladjustment in Singaporean adolescents. *Personality and Individual Differences*, **43**, 2193-2204.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- Zahn-Waxler, C., & Robinson, J. (1995) Empathy and guilt: Early origins of feelings of responsibility. In J. Tangney & K. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions*. New York: Guilford Press. pp. 143-173.

Summary

The Relations between Emotional Competence and Self-esteem

Yasuyo Nishino

This study aimed to develop the scale for assessing emotional competencies and to investigate the relations between emotional competence and self-esteem. In the first study, ninety-seven undergraduates participated in questionnaire survey. Five categories of emotional competencies were examined, such as awareness of our emotional state, understanding of the emotional of others, capacity for empathy and sympathy, management of emotional expressiveness, and effective emotion regulation. In the second study, the relation between emotional competence and self-esteem was examined. The data indicated that boys and girls with high self-esteem could effectively regulate negative emotion and manage emotional expression. The data also indicated that capacity for empathy and sympathy was related to self-esteem among only boys. Implications and limitations of these findings are discussed.

【key words】 emotional competence, self-esteem, gender difference, undergraduates